

勸学会共同研究助成報告

常喜院・心覚の教学について

——中世・真言教学研究のための基礎作業——

中世真言教学研究会

目次

〔序〕

〔1〕「伝記資料よりみた常喜院・心覚——心覚と彼をめぐる人々——」

〔a〕関連伝記資料一覧

〔b〕心覚の素養「天台教学」

〔c〕心覚、東密転向の動機「最勝会における宗論」

〔d〕東大寺別所・光明山寺への入山

〔ア〕東大寺・三論宗と光明山寺「覚樹門下の三論学匠と光明山寺」

〔イ〕南都浄土教と光明山寺「実範・珍海・重誉・永観」

〔ウ〕東密・小野流と光明山寺「勧修寺・寛信と醍醐寺・実運」

〔e〕——結語——心覚とはいかなる人物か

〈2〉「心覚選述の著作にみる教学」

〔a〕常喜院流伝書目録

〔b〕密教諸尊法伝受と図像資料編集

(ア) 成蓮坊・兼意↓『成蓮抄(じょうれんしょう)』 Ⅱ 広沢・観音院流

(イ) 勝俱胝院・実運↓『玄秘抄(げんぴしょう)』 Ⅱ 小野流・醍醐流

(ウ) 理性院・賢覚・宝心↓※『鶴林鈔(かくりんしょう)』 Ⅱ 醍醐・理性院流

(エ) 勝(上)定坊・恵什↓『図像抄(ずぞうしょう)』 Ⅱ 広沢・保寿院流

〈おわりに〉

諸流兼学の先駆者たち「心覚と覚鏤」

「序」

本研究に取り組んだ動機は、二年前、高野山親王院および密厳教会本部において、大阿闍梨に豊山派・集議席の故南波義範大僧正を屈請して行われた、興教大師八百五十年慶讃・大伝法院流伝授会への参加の時期にさかばる。

そこでは、厳格な灌頂・印可の儀式にはじまり、大伝法院流所伝の四度・灌頂・諸印信等が伝授され、あわせて親王院所蔵の伝流聖教が印刷・頒布された。

筆者は、この時ある疑問を感じた。

それは、以下の四つの相互関係についてである。

- ① 伝法院流でおこなわれる前後三回にわたる印可の形式、
- ② 伝流所伝の伝法の密印・真言、
- ③ 伝流所伝の印信・血脈、
- ④ 伝流所伝の聖教。

この時、筆者が印可を受けた印象では、伝流で行われる前後三回という印可の回数は、小野流の初重・二重・三重という重位を意識したもので、実際の伝法は『伝流五重』の都合九つの印契の伝授であり、なかんずく第九番目の印は『小嶋第九塔印』の印信に帰結し、実際の行法や法会には広沢流の聖教を類聚した伝流聖教を用いるという、実に野沢諸流のエッセンスを灌頂・印可の場面で集約し、合理化したものであった様に感じた。

その時の伝授では、全三回の印可が行われ、その折々に印信・血脈がわたされた。それらの中に、本稿で取上げる常喜院・心覚にまつわる、二点の切紙が認められた。

南波義範大僧正相承『印信集』（野澤諸法流印信類聚刊行会編）所収の伝法院流慶信相承二十四包を例にとれば、

第四番『常喜院流大事(傳流)』、

第八番『臨終大事』の二点がそれである。

『常喜院流大事(傳流)』は、伝法印可の印信・血脈で、次のような内容をもつ。

①『常喜院流大事(傳流)』二紙・一包

ア「授与伝法灌頂印可事

胎界 内外五股印 満足一切智々五字明

歸命 ア・ビ・ラ・ウン・ケン

金界 大率都婆印 五智種

歸命 バン・ウン・タラク・キリク・アク

金剛名号 遍照金剛……」

イ「両部伝法血脈

大日……空海大師……二品親王 寛意僧都 兼意阿闍梨 心覚阿闍梨……」

『臨終大事』は、文字道理、臨終の作法を切紙にしたもので、次のような内容をもつ。

②『臨終大事』……

「印 外縛二大指入縛 明 ア……」

(裏 書)

「臨終大事は、常喜院流上人、第十六世、心蓮院・信嚴法印より、当流に相承す。……」

これは後に触れるが、常喜院流の特徴の一端を形成するもので、諸流兼学と臨終時における浄土教の解釈を、端的に表現したものであろう。

本稿では、常喜院・心覚の教学の特徴を、上の二通の印信に顕著な、諸流兼学と浄土教の理解にあるという視点でとらえた。

このうち、諸流兼学は、上に紹介した覺鑊の伝法院流にもみられるもので、この当時の密教・仏教修学者の、常識的修学方法ではなかっただろうか？

浄土教の隆盛については、覺鑊や心覚が活躍したこの時代が、釈尊の入滅から数え、〃末法の世(伝・最澄撰『末法灯明記』(日本大藏經第四十卷・天台宗顯教章疏二)が、この頃の末法思想の根拠とされた書である。平安末期には、釈尊の入滅を紀元前九四九年(壬申)とし、正法千年、像法二千年、永承七年(AD一〇五二)から末法の世に入るとした。〃のさなかにあたることを契機とする。

おりしも、この頃は「保元・平治の乱保元元年四月二十七日(AD一一五〇)平治元年四月二十日(AD一一五九)」に代表されるように、各地で争乱が頻発し、その結果、いづれ貴族中心の官僚的社会形態、武力を背景とする武士中心の社会形態、白河・鳥羽「崇徳」・後白河院による院政と、社会構造がめまぐるしく融合、変化を遂げつつあった。

このような時代的背景から、当時の宗教的関心は、遠離穢土・欣求浄土を熱望する、いわゆる浄土教にむけられた。

むろん、しばしば識者が指摘するように、当時、一口に浄土教といっても、きわめて大ざっぱに分けて、以下の三つのタイプが存在していた。

- ① 比叡山延暦寺を拠点としてきかえ、日本天台の教学の一翼になった、いわゆる叡山浄土教
- ② 南都東大寺・東南院の周辺で理論が形成され、山城の国別所・光明山寺を拠点にして信仰・実践された、いわゆる南都浄土教

③高野山金剛峰寺を拠点に、南都浄土教と真言密教が邂逅した結果、醸成された、真言密教系浄土教

①の叡山浄土教からは、京都の黒谷を拠点とした、法然坊・源空の門流が発生し、

②の南都浄土教は、光明山寺に（勸修寺大僧都）嚴覚をはじめとする真言密教小野流の諸阿闍梨が関与したことから、中川成身院・実範、光明山・重誉、また常喜院・心覚や靜遍など、いずれ真言密教系浄土教の流れを形造った人々を輩出した。

③の真言密教系浄土教は、②の南都浄土教から理論面・実践面に多大な影響を受け、いずれ、大伝法院・覚鑊に代表される、密教・浄土教融合の新たな浄土教を形成していった。その流れは、正智院・道範の『秘密念仏鈔』（真言宗安心全書下）に集成されたといえよう。

筆者は、上述のように、真言密教の諸流兼学と浄土教の邂逅が、中世の真言教学の特徴を形成した素地の一つになったものと考ええる。

ここでは、上述の問題を、心覚に関する伝歴史料をよみとくことによって、導き出そうとする。

〈1〉「伝記資料よりみた心覚像―心覚と彼をめぐる人々―」

〔a〕関連伝記資料一覧

「一」常喜院・心覚略伝

- ①『紀州高野山・沙門心覚伝』（以下『心覚伝』／『本朝高僧伝』巻第12・日仏全・第63巻・pp89）
「釋・心覚」。

(ア) 参議・大夫・平の実親(さねちか)の子なり。

(イ) 園城寺に入り、剃髪・納戒し、十乗観法を学す。

(ウ) 一日(あるひ)、禁殿に応招され、興福寺・珍海と宗義を論説す。

(心) 覚、詞答に屈す。

(エ) これによって、頭を捨てて密に帰し、醍醐の賢覚・実運の二師より、小野の法流を受け、和州・光明山に入り、山中を出でざること二十五年、苦修砥礪す。

(エ) 後、高野山に登り、阿闍梨・兼意に就て、三部の奥玄を究め、両界の灌頂を受け、密部に精尋し、多く『疏』・『鈔』を著す。

(オ) 素(もと)より僧官を嫌つて、菩提をこい願ひ、常喜院を営む。

考盤(思うに任せる)の意をとえ、三時に経を誦し、朝・昏に礼懺す。

養和三(二) (AD 一一八三 or 一一八四) 年夏四月、にわかに病悩に邁(あ)うとも、日課を廃(おこ)たらず。

六月二十四日、印を結び坐して化す。(治承四年(AD 一一八〇) 六月二十四日※『血脈類聚記』・『高野

春秋』)

② 『遍照光院累代院譜并追加』(以下『院譜』／『金剛峰寺・諸院家析負輯』巻10・続真全・pp 598 a)

「第三世・心覚・仏種坊(号は宰相阿闍梨。治承四年六月二十四日に寂す)ある記にいう。

(ア) 「心覚は、参議・平の実親の息なり。

(イ) 三井寺・常喜院の住僧なり。

(ウ) 年月、法輪の事によって、高野山に籠居す。

いわゆる法輪は、院の最勝講の時、

問者（心覚）

講師（興福寺・珍海已講）

証義（寛信法務）

（エ）この時、論諍によって寺を離れ、改宗して密家に入る。

本より高識あつての故に（世俗には三井の青淵と称す）。

野沢の奥旨を推窮して、高野に入り、往生院の（この流儀を往生院流と号す。また常喜院と称するは、本より名を立てるなり）遍照光院に住す。」

宏教（本は禅遍）律師の記にいう。

「往生院（心覚）は、

兼意

ならびに覚印（平等坊・永嚴法印の上足の資）

および宝心（理性院・法眼・賢覚の上足の付弟なり）等の闍梨の付法なり。そのほか仁和・醍醐問津の人なり。

すなわち入密の初めには、常喜院流と号す。住山の後には、往生院流と称す。」

ある口決にいう。

「常流、予見自作の次第は、

『折り紙』と

『小巻物』（百八通なり）となり。

これを北御(北院御室・守覚法親王)述製の時『折り紙』を類集したまうを『心抄』と名ずく。
『小巻物』を広述せらるるを『心密抄』と名ずく。」

当流伝授記

「『四度次第』

『灌頂私記』

『大事一度』(二紙・血脈)

『心抄・小折り紙』(五十二尊、門不足か)

『心密抄・小巻物』(十四卷。このほか『異尊』上下二卷)

『心密略抄』七帖(已上を三部抄と号す)

『作法集』四卷

『別尊略行抄』三卷(成浄坊作)

『小巻物』(百八通)

『常抄』(十二卷)

『諸尊行法』(上下二卷)

『成蓮抄』二十卷

『真言集』三卷

『讃集』一卷(紀の上人に在るばかり)

『別尊雜記』(五十卷)「

右のほか、予見自草の目録これあり(八十九部・数百卷)。

『参語集』にいう。

「『別尊秘藏抄』は予見の作なり。

兼意・寛意・恵什・実運の四大徳に学習せるところの深義を、述作せらるるなり。『別尊雜記』これなり。」

心覚、院務の間は、安元元(AD一一七五)より治承四(AD一二八〇)にいたるまで、始終六年なり。

『古院譜』にいう。

「承安五(AD一一八一)、湛増(たんどう)の譲与を得、当院に住す。…」

③『仁和寺・諸師年譜』(以下『年譜』／続群書類従・第八輯・卷第百九十五・pp219b)

「宰相・阿闍梨・心誉(※覚の誤り)。

(ア) 俗姓・平氏。参議・実親卿の息なり。

(イ) 元・園城寺の常喜院に住し、天台教を学す。

(ウ) 綱維の崇班をねがわず、ただ無上菩提をもつて希望となす。

二十五にして、ついに本寺を去り、衣を改めて東密に入る。

(エ) 高野山に隠居して、長和親王の付法、禪定院僧都・寛意の付弟、兼意阿闍梨に従つて、密灌を受け、

三部の奥旨を究め、ことごとく諸尊の秘法を伝う。

三時に行法して、一日として休息せず。

ある時、心覚、師を詣ねて、大師の『遺告』の伝受を求む。

(兼) 意おもえらく。

「彼は元、他門の徒なり。みだりにこれを容(い)るべからず」と。

すなわち遅疑すること久し。

ある夜、意、夢みるに、大師、親（まのあたり）りに来りて告ぐ。

「心覚は行業純一にして、道志堅固なり。

ほしいままに仮に『遺告』を許授するに、

何ぞ疑うところあらん。

早くこれを授くべし。」

（兼）意驚覚して、これをあやしみ、嘆ず。

すなわち、使を遣わして（心）覚を召す。

（心）覚も、また、大師の夢告を蒙って、すなわち起ちて、師のところに赴かんとす。路において、

（兼）意の使と逢い、相ともに、師のところに詣り、夢告の旨を呈す。師の夢と、いささかも違わず。

ここにおいて師資は感嘆して涙を雨ふらし、即時に『遺告』を伝授す。

（オ）（心）覚すなわち自の一流を建立す。

すなわち、広沢に常喜院流と称するは、これなり。

（カ）養和二年（AD一一八二）四月（あるいは治承四年／AD一一八〇）微恙を示し、ついに日を重ぬ。

しかりといえども、日課は更に怠りなく、死期を知るに預れり。

六月四日にいたり、病床より起ちて端坐し、手に印を結び、口に明を誦して、奄然として化す。

（キ）製作の尊法・書籍等はなはだ多し。目録、別にあり。」

④『高野山往生伝』（以下『往生伝』／続群書類従・第八輯・卷第二百・pp 380 a）

「宰相・阿闍梨・心覚。

（ア）園城寺の住僧。

参議・平・実親卿の息なり。

(イ) 智證の門弟に列し、天台の教觀を学す。

(ウ) 綱維の崇班を樂わず。只、菩提を以て望みとす。

廿五の年、光明山に住す。

その後、彼の山を出、当寺に住し、阿闍梨・兼意に逢い、

三部の深旨

諸尊の秘法、

兩界の灌頂を究め、

三時に行業し、朝暮に礼懺し、在生の間、休息せず。

(エ) ここに養和二(AD一一八二年四月の比、病床に臥し、愈すべからざるを知る。

然りと雖も、日課は不退にして、先んじて死期を知る。

六月二十四日にいたり、起立端坐して、印を結び明を誦し、奄然として滅す。』

⑤『本朝新修往生伝』(続群書類従・第八輯・卷第百九十九・pp 362 a)

「入道・参議・左大弁・平の実親は、

(ア) 右大弁・時範朝臣の子なり。

(イ) 才は文学に名づけ、その先祖を亜す。

器量周薫、流俗に混ぜず。

(ウ) 尚書の廷尉、五六の侍中、顕要の官、同時に兼帶す。

初め数国の刺史を歴、後に太宰府の都督に任ず。

家富位貴、名望軼人。

(エ) 内には道心に住し、外には慈仁を行ず。

諸寺・諸山、悲田・獄舎、窮困を訪いては、常に飲食を施す。

(オ) 園城寺の裡に、一の仏閣を建て、夏藹を安置す。

しばしば日食を行じ、また白川を占す。

新たに精舎を結んで、暁夕に礼懺す。…

一乗を講ずるに、千日を以て限りとす。聴聞市を成す。功德隣有り。

自余の仏事は、一二いとまあらず。

(カ) 杖郷の齢に及んで、ついに出家の願を遂ぐ。持戒精進して…

久安二年(AD一二四六)二月日、病に依って薨卒す。…」

「二」 勸修寺・寛信略伝

① 『城州勸修寺・沙門寛信伝』(以下『寛信伝』／『本朝高僧伝』巻第12・日仏全・第63巻・pp88)「釈・寛信。

(ア) 大蔵卿・藤の為房の子なり。

(イ) 天性・明発、しかのみならず精勤するをもって、

覚樹において三論を習い、

嚴覚において三密を習い、

義解の名を両都において揚ぐ。

(ウ) 康和五年 (AD 一一〇三)、勧修寺・権別当職に補し、

天仁三年 (AD 一一一〇)、別当職に補し、

永久二年 (AD 一一一四) 冬、維摩会講師となり、

元永初年 (AD 一一一八) 夏、最勝会講座に登り、

大治元年 (AD 一一二六)、元興寺に住し、二会講を歴、

四年 (AD 一一二九) 冬、権律師に任じ、修営の労を賞むるなり。

康治元年 (AD 一一四二)、東寺長者に任じ、ぼく黄を賜いていう。

「昔、天延中、定照僧都、東寺長者となり、法相・真言の貫首を兼ね。その後、絶えて続ざる」と二百余年。

いま、この任を膺す。その才徳を知るべし。」と。

(同右) 権大僧都に任じ、

久安元年 (AD 一一四五)、寺務を領し、

明年 (AD 一一四六)、法務を兼ね。

この年 (AD 一一四六) 五月、最勝会の証義に預かる。これ三論宗・証義の始めなり。

三年 (AD 一一四七) 夏、東大寺務に補し、初めて御齋会の講師を膺す。

問者に送る詞にいう。

「真言院道場には、かたじけなくも瑜伽座を汚し

龍尾の壇の講肆には、いやしくも論談の筵に連なる。

天延の古跡を訪 (とぶら) いては、二百回の日月を隔て、

永治の新恩を載しては、万歳の最初に陪(はん)べる。

康治・久安の間には、

(寛) 信、禁中に於いて、如法尊勝法を修し、

承陽舎に於いては、仁王経法を修し、修する毎に験を得。」と。

(エ) 仁平三年(AD一一五三)三月七日寂。歳すでに稀年なり。

(寛) 信、書を閲して寝まず。ようやく五更に達して、沐浴して牀に就く。大率常なり。

(オ) 『類秘鈔』・『類顕鈔』など若干の巻を著す。…」

「三」 禅那院・珍海略伝

① 『和州禅那院・沙門珍海伝』(以下、『珍海伝』／『本朝高僧伝』巻第12・日仏全・第63巻・pp88)

「釈・珍海。

(ア) 延臣・園の基光の子なり。

(イ) 早く覚樹に従って、その肯綮を究め、器度清敏にして、人に問うを好み、華嚴・法相・因明を研核す。

(ウ) 三会の講を歴。師席に登る毎に、詞峰俊利にして、敢えて当たる者なし。時に人、僉じていう。「文殊の応化なり」と。

(エ) 仁平年中(AD一一五一―一一五四)、禅那院に住し、『法華』・『維摩』・『勝鬘経』を講ず。暮年に暨(のぞ)んで、また浄業を修し

『浄土義私記』

『決定往生集』（大正蔵八四卷・二六八四番）

『浄影義章』を選す。

（オ）珍（海）、丹青を善くす。

伝法院・覚鑠と割席の遇有り、金剛界大日像を描き、もってこれを贈る。

余、禅那院に抵して、写照瞻礼す。鼻頭隆準、口角方廣なり。すなわちその異人なるを知る。

（カ）（仁平二年（AD一二五二）十一月二十三日、年六十二にして入滅。※『宇槐記抄』）

「四」光明山寺・重誉略伝

①『和州光明山・沙門重誉伝』（以下、『重誉伝』／『本朝高僧伝』巻第12・日仏全・第63巻・pp88）

「釈・重誉。

（ア）姓系、詳（つまびらか）ならず。

（イ）東南院の覚樹に従って、三論を研練し、兼ねて密蔵に通ず。

（ウ）広衆の交を厭い、光明山に入り、浄業に従事す。

（エ）所住において、終（つ）いに『西方集』三巻を著す。

又、同時に樹朗有り。

東大寺・理真律師において空宗を稟け、東南院に住し、三論を開講す。

（重）誉とならぶ名にして、当世の鸞・鳳と称うなり。

晩く精舎を結び、所業を捨て、浄刹を修す。

系にいう。三論とは龍樹にして、諸法蕩滌の宗なり。

然るに智光・礼光から珍海・重誉に至り、浄土を求め、弥陀を慕うは、宗旨に違ふこと無しや否や。通じていう。菩薩、『智度論』に説く。「往々に弥陀を称う。」

『十住毘婆沙論』に「弥陀を易道となす。」と。

かるが故に、曇鸞は龍樹をもつて浄教の高祖となす。迺祖すでにしかなり。何ぞこれに違（たがい）あらんや。

けだしそれ、事・理の二法は、世界の建ずるゆえん。しかも先仏の教をひもとくところなり。色即是空、すなわち一塵にて何をか立つ。

空即是色、すなわち十界宛然たり。一紀三藏の単空をもつて、同日にして難ずべからず。」

「五」勝俱胝院・実運略伝（寛信から元海へ傾斜して、寛信に炎魔天供で調伏される。）

①『城州・醍醐寺・沙門実運伝』（以下『実運伝』／『本朝高僧伝』巻第52・日仏全・第63巻・pp707）
「釈・実運。

（ア）左僕射、俊房源公の子なり。

（イ）弱歳にして醍醐寺座主・勝覚に従つて、真言教を学び、

勧修寺の寛信に灌頂を受け、

諸の密軌を伝え、

兼ねて三論を受く。

（ウ）勧修寺に住んで、官は僧都に任ず。

盛んに瑜伽を唱えて、後に元海に承く。

(寛) 信公これを怨み、勧修寺に在るところの秘軌をもって、写し取り、侘び寺において、壇場を結成し、もって(実)運を調伏す。

第七日にいたり、庭の中に声ありていう。

「修願成就」と。

(寛) 信のいわく。

「何れより告げらるるや」と。

いわく。

「炎魔王宮なり」と。

信すなわち壇を撤す。

未だ幾ばくもせずして、運は毒瘡を嬰らい、永暦元年二月二十日寂す。」

「六」成蓮院・兼意略伝

①『遍照光院累代院譜并追加』(以下、『兼意伝』／『金剛峰寺・諸院家析負輯』巻10・続真全・pp597b)

「第二世・兼意・成蓮坊

(ア) (皇后の宮・亮藤の定兼の息なり。)

(イ) 案ずるに、兼意は、嘉保丙子年(すなわち永長元なり。|| AD一〇九六)五月十三日、この院に於いて入壇す。すなわち寛意の第六の付法なり(行年二十五)

康和三年(AD一一〇一)寛意の入寂の後、京畿・南山を来峰するの間、付法三十人なり。なかんずく、心覚阿闍梨を第七の析負となす。

保元元年（AD 一一五六）四月十九日、往生院に於いて入壇す。

教授（俊覚闍梨）

護摩（寛成）

誦経（明義）

嘆徳（記者失名）なり。

（エ）この述作せる書は『成蓮抄』（二十卷これあり。）

蓮説（成蓮坊の説なり。）

予蓮（高野・成蓮坊の密号なり。）なり。

兼意の寂後、御室より当院を進退せしめたまう。

大治（崇徳院）五年（AD 一一三〇）華藏院の宮（聖恵）の来御あり。その後、新・熊野の別当・湛増に課して、修補あり。

いわゆる湛増は、白河院の三山御幸の時（寛治四年／AD 一〇九〇）、故あつて大峯筋の事を職（し）る。

当山をも峰の中として、この任に預かる。これをもって湛増より心覚に譲与せるところなり。世人、誤って湛増をもって住持と談ずるは非なり。

保元年中、宝心・浄蓮坊（号は上野（こうずけ）阿闍梨、本は賢覚の資なり。）、登山受法して往生院に寂す（承安四年九月朔日＝AD 一一七四）。

成蓮と浄蓮と、その名を混乱すべからざるものなり。
ある記にいう。

「兼意、はじめて当院に住す。」

当院は、大路の際にして闐然ならざるによつて、小河を相い隔てたる、谷の奥なる坊に入り、住したまうと」云々。（今の成蓮院はその旧跡か）」
その間、宝心閣梨は当院に住せらるるか。

〔頭注〕（白河皇、金峰山御幸は、寛治四年なり。大治以降には非ざるなり。）」

「七」 禅林寺・永観

①『洛東・禅林寺・沙門永観伝』（以下『永観伝』／『本朝高僧伝』巻第11・日仏全・第63巻・pp83）
「釈・永観。」

（ア）文章博士・源の国経の子なり。

（イ）勤息の法を慕い、年わずか、小学にして山崎・国成寺に入る。

不動呪を授くるに、一聞にしてすなわち記し、夢中に呪を誦す。
寺主（てらし）、徒にいいて、いわく。

「この児は、宿世の仏種なり」と。

（ウ）十一にして、禅林寺・深観僧都にしたがつて、剪髪・受業す。

（深観は）観華山帝の子、深覚の資なり。

真言に精じ、（深）観の左右に給事す。ついに密灌を稟く。

（エ）辞して東大（寺）に往き、登壇・具戒す。

有慶・顕真の師資にしたがつて、三論の窮玄を伝え、

たずねて、杜中に遊んで、華嚴・法相を聴く。

(オ) 年、而立(三十才)にいたりて、光明山に入り、余営を摩斥し、ひとえに浄業を修す。山棲・谷飲すること、およそ十年なり。

(カ) 道友しいて起ち、禪林の古寺に住し、空宗を演唱して、かねて安養を勧め、洛下に奔赴して、大いに化門を立つ。

寺の巽(東南)の隅に、東南院を構え、長坐・浄修して、もって歲月を送る。

応徳二年(AD一〇八五)(東大の次第には三年につくる)、勅を奉じて、維摩会の講師となり、寛治八年(AD一〇九四)、七宝の塔を作つて、舍利二粒を安ず。

寅の昏に礼懺して、いう。

「もし、我、安養に生ずれば、すなわち舍利、まさに増すべし。

果して、分倍するに感じて、丈六の弥陀像を造刻し、分倍舍利をもつて、仏の眉間に納め、薬王院に安ず。」

承徳三年(AD一〇九九)(『拾遺伝』を案ずるに、承徳四年に作る。二説ともに疑うべし。『東大次第』を案ずるに、康和二年五月二十一日(AD一一〇〇)、日任の年、六十八という。)、まさに南衆の挙におうじて、東大寺に住す。

鈴轄を司るといへども、常住の物を用いず。

自ら資糧を蓄え、もつて斎鉢に供す。

衆僧の風を把るに、寺院嚴肅たり。

住持すること二年、また洛東に帰す。

性は極めて慈仁にして、常に圜圉（牢獄）に往きて、囚人の苦を恤（あわれ）んで、説法し授戒す。

また学を好んで倦（う）まず。

しかるに、病多くして、体弱し。

かつていう。

「病者人の善知識なり。

我、病質なるをもつての故に、四大の堅ならざるを知る。」

〔b〕 心覚の素養 「天台教学」

上掲した諸史料のうち、東密転向以前の心覚について言及するものに四点がある。それらの史料が語る、当時の心覚についての描写は、おおむね次のようである。（なお、前掲史料中の当該箇所はア・イ・ウ等で示した。その引用は現代語試訳とした。試訳の「」内は、私に補ったものである。）

① 『心覚伝』（イ）には、

心覚は「園城寺」「三井寺」において、出家・受戒し、

「『天台摩訶止観』の〈正修章〉所説の」十乗観法を学んだ。」といわれ、

② 『院譜』（イ）では、

「三井寺・常喜院の住僧。」とあるのみで、

③ 『年譜』（イ）には、

「はじめは園城寺「三井寺」の常喜院にいて、天台教を学んだ。」といわれ、

④『往生伝』(ア)(イ)には、

「園城寺「三井寺」の住僧で…

智證「大師・円珍」の「おこした天台・寺門の」流れにつらなり、

天台「摩訶止観」を学んだ。」という。

これら四点の史料が語る内容を整理すれば、次のようである。

(1) 心覚は三井寺において出家し、受戒した。

(2) 三井寺の常喜院が住坊であった。

(3) 『天台摩訶止観』を中心に天台の教観を学んだ。

〔c〕心覚東密転向の動機「最勝会における相論」

東密転向の直接の動機とされる最勝会について、言及あるいは関連があるものに、次の六点がある。それらの史料が語る、当時の心覚についての描写は、おおむね次のようである。

①『心覚伝』(ウ)によれば、

「心覚は」ある日、宮中に招かれ、

興福寺・珍海と、「天台宗と三論」宗「の教」義をたたかわせた。

(心)覚は「珍海の問いかけに対して」答につまった。

これを契機として、天台宗から真言宗に転向した。……」といわれ、

②『院譜』(ウ)(エ)では、

「心覚は」論義の結末「を不服とすること」によって、高野山に引き籠った。その論義とは、「崇徳」院の最勝講のことで、

「その時の配役は」

問者 心覚

講師 興福寺・珍海已講

証義 寛信法務であった。

「心覚は」この論義における論争「に破れたこと」によって、

「三井」寺を離れ、天台宗から真言宗に転向した。……」といい、

③『年譜』(ウ)では、

「……二十五才の時に、三井寺を去り、真言宗に転向した。……」といい、

④『往生伝』(ウ)では、

「……二十五の年に光明山「寺」に入った。……」という。

上記史料②には、崇徳院の最勝会における論義の配役が明記される。

そこで問者・心覚の論戦相手として講師をつとめた、興福寺・珍海と、その論義における証義者をつとめた寛信・法務に関する描写を、『珍海伝』・『寛信伝』の中に、それぞれさぐってみる。

⑤『珍海伝』(イ)(ウ)では、

「…「珍海は」若くして「東大寺・東南院の」覚樹に師事して、三論教学の精髓を究めた。その器量と度量は傑出しており、その上、質問癖があった。」

華嚴

法相

因明の学をも学んだ。

南都三大会「興福寺の維摩会・薬師寺の最勝会・宮中の御斉会」のすべてに及第した。

また同じく三大会の講師をつとめる度に、論旨明快・舌鋒鋭く、太刀打ちできるものがいなかった。

それをまのあたりにした人は、驚嘆して「文殊菩薩の化身である。」と語った。…」

⑥『寛信伝』(イ)(ウ)では、

「…「東大寺・東南院の」覚樹に師事して三論を学び、

「勸修寺」嚴覚に師事して「小野流」真言密教を伝受され、

奈良および京都「の論義の場」において、学匠としての名声を馳せた。

…久安二年(AD一一四六)五月、「崇徳院における」最勝会において、証義「者」の役を勤める。これが三論

宗所属の学匠による証義者の初例である。…」

これら六点の史料が語る内容を整理すれば、次のようである。

(1) 心覚が真言宗へ転向する直接のきっかけとなった、院の御最勝講とは、

久安二年五月、崇徳院にておこなわれたもようである。(『寛信伝』参照)

(2) その際の配役は、

問者 心覚「天台宗」

講師 珍海〔三論宗（真言宗）〕

証義 寛信〔三論宗（真言宗）〕

（3）講師・珍海は、

①②の両史料では、興福寺の僧とされている。

しかし『珍海伝』や『醍醐寺新要録』等の史料では、東大寺・東南院の覚樹門下の、きわめて優秀な三論学匠として、珍海を位置づけている。東南院は真言宗の所管でもあった。すなわち、珍海は三論宗（真言宗）の僧である。

（4）証義・寛信は、

珍海と同じく、東大寺・東南院の覚樹門下であり、三論宗の代表者となった人物である。また真言密教・小野流を勧修寺・巖覚から伝えられ、その後継者となり、世に勧修寺の寛信・法務と称された。

（5）心覚が真言宗に転向した動機は、

直接的には論義における敗北に起因するのかもしれない。

しかし、㊦後に東大寺の山城国・別所である光明山寺に遁世したこと、

①珍海・寛信が、小野流／醍醐流の真言密教者としても著名であったこと、

㊦同じく両者が関与した、真言密教・小野流の一派が、光明山寺を拠点として活動していたこと、こういった要素が心覚東密転向の複線として予想されることは、注意されるべきではないか。

「d」東大寺・山城ノ国別所・光明山寺への入山

前項において、心覚の真言宗への転向の動機、およびその複線として予想されるいくつかの問題点を指摘した。ここでは、心覚の入山した時期について確認しておく。

それについて言及があるものに、次の六点がある。それらの史料が語る、当時の心覚についての描写は、おおむね次のようである。

①『心覚伝』（エ）によれば、

「…『山城ノ国』現・京都府綴喜郡」和州（むしろ山城だから他の史料の様に、城州とすべきではないか？）・光明山に入山して、二十五年の間修行に励んだ。…」といわれ、

②『年譜』（ウ）には、

「二十五歳の時、三井寺を去って、真言宗に転向した。…」とある。

③『往生伝』（ウ）には、

「二十五の年に、光明山に入山した。…」とある。

これら三点の史料によれば、心覚入山の年次は次のようである。

（1）二十五という年次を、光明山寺籠山年数にとる①の『心覚伝』の場合、

心覚入滅の年次、養和三（二）年（AD 一一八四 or 一一八三）から逆算して、

ア 養和三年＝平治元年（AD 一一五九）

イ 養和二年＝保元三年（AD 一一五八）

以上のアイのいずれかの年まで、心覚が光明山寺に籠山していたことになる。

(2) 二十五という年次を、当時の心覚の年齢とする②『年譜』③『往生伝』の場合、心覚は久安二年(AD一四六)もしくは天養元年(AD一一四四)に光明山寺に入山したことになる。因みにこれによれば、心覚没時の年齢は、六十一歳前後ということになる。

「e」 東大寺・三論宗と光明山寺

ここでは、心覚の入山した、光明山寺に関わる三論学匠たちについて確認しておく。それについて言及があるものに、次の四点がある。それらの史料が語る、当時の光明山寺遁世僧周辺の人々の描写は、おおむね次のようである。

①『寛信伝』(イ)(ウ)には、

「∴〔東大寺・東南院の〕覚樹に師事して三論を学び、

〔勧修寺〕嚴覚に師事して〔小野流〕真言密教を伝受され、

奈良および京都〔の論義の場〕において、学匠としての名声を馳せた。∴」

②『珍海伝』(イ)には、

「∴〔珍海は〕若くして〔東大寺・東南院の〕覚樹に師事して、三論教学の精髓を究めた。

その器量と度量は傑出しており、その上、質問癖があった。

華嚴

法相

因明の学をも学んだ。∴」

③『重誉伝』(イ)(ウ)(エ)には、

「重誉は、東南院の覚樹に従って、三論『教学』を修学し、兼ねて真言密教に通じていた。

大衆と交わる煩を厭い、光明山に入って、修行に励んだ。

そこで、『西方集』三巻を著した。…」

④『永観伝』(ウ)(エ)(オ)では、

「永観は、十一歳の時、『京都』禅林寺の深観僧都にしたがって、剃髪し受戒した。

〔深観は〕観華山帝の子で、(東寺長者)深覚の弟子である。

永観は、真言密教に精通しており、深観の傍らにいつも付従っていて、ついに灌頂を受けることができた。

〔その後〕深観のもとを去って、東大寺に赴き、具足戒を受けた。

有慶・顕真の師弟にしたがって、三論宗の奥義を伝承し、

諸方に遊学して、華嚴・法相を学んだ。

三十の時、光明山に入って、浄土教の修行に没頭すること、およそ十年であった。」とある。

以上の内容を整理すると、次のようである。

(1) 光明山寺は、東大寺の山城の国別所である。

(2) 光明山寺は、東大寺・東南院の覚樹系統の三論学匠たちの多くが遁世した場所である。

(3) 光明山寺に遁世した三論学匠たちは、多くの場合、厳覚の系統の真言密教・小野流を相承していた。

(4) 光明山寺に遁世した、真言密教系三論宗の人々は、官僧としての煩雑な生活を嫌って、修行三昧を志向し、浄土往生をねがった。

(イ) 南都浄土教と光明山寺

① 『重誉伝』には、

「重誉は、…光明山寺において、『西方集』三巻を著した。

重誉と同じ頃、樹朗という僧がいた。

東大寺の理真律師にしたがって三論宗を学び、同寺の東南院に住み、三論教学の講筵を開いた。

「東大寺・東南院・三論宗では」重誉と双壁で、当世の鸞・鳳と称された。

晩年に庵を結んで、三論教学の学習を捨て、浄土念仏を実践した。

このような問答があった。

問う。「三論宗は龍樹に帰されるもので、諸法蕩滌の宗である。

それなのに、智光・礼光にはじまって、「最近では」珍海・重誉の様に、浄土を求め、阿弥陀を慕う

ことは、三論宗の宗旨に反するのではないか。」

答える。「龍樹菩薩は『智度論』に「往々に弥陀を称う。」と説き、『十住毘婆沙論』に「弥陀を易道となす。」

といっている。

だから、曇鸞は龍樹をもって浄土教の高祖とする。

龍樹菩薩にして、すでにそうではないか。どうして三論の宗旨と浄土念仏が相反するということがあるだろうか。…」

② 『永観伝』(オ)(カ)

「永観は、…三十の時、光明山に入つて、浄土教の修行に没頭すること、およそ十年であつた。道友と禅林寺に住んで、三論宗の教学を吹鼓して、かねて安養浄土を信仰することを勧め、京都中で大いに教化をおこなつた。

寺の東北に、東南院を構え、坐禅と浄土の修行をおこなつて、歳月を送つた。

寛治八年(AD一〇九四)、七宝でできた塔を作つて、舍利二粒を安置した。

寅の刻、礼懺して、次のようにいつた。

「もし、私が安養浄土に生れることができるのなら、この舍利は必ず増加するであろう。」と。

その結果、舍利が増加したので、それに感激した永観は、丈六の阿弥陀像を造刻し、増加した舍利を、その仏の眉間に納め、薬王院に安置した。…とある。

上記の内容を整理すると、次のようである。

(1) 東大寺・東南院・三論宗では、三論教学と浄土教の融合・合理化が試みられていた。

(2) その根拠は、龍樹の撰と信じられた『大智度論』、および『十住毘婆沙論』に求められ、その信憑性の高さは、曇鸞が『大智度論』『十住毘婆沙論』の文を用いて浄土教の位置づけを試みた論法に求められ、

その伝統は、智光・礼光・珍海・重誉の行歴によって、権威づけられている。

(3) さらに、その具体的実践は、

三論教学の学習は、東大寺・東南院を拠点としておこなわれ、

浄土教の実践は、山城ノ国・別所の光明山寺においておこなわれた。

(ウ) 心覚の高野山入山

ここでは、心覚の高野山入山について確認しておく。

それについて言及があるものに、次の四点がある。それらの史料が語る、高野山における心覚の描写は、おおむね次のようである。

① 『心覚伝』(エ)(エ')には、

「心覚は、…光明山に入って、二十五年間籠山して、修行に励んだ。

その後、高野山に登り、兼意阿闍梨にしたがって、密教の奥義を究め、

両界の灌頂を受け、

密教経軌や諸尊法を研鑽し、

多くの著作を著した。

本来、官僧の世界が嫌いで、ただ悟りだけをこい願って、常喜院を営んだ。

思うに任せて修行することを決心して、朝・昼・晩の三回に経を唱え、朝・晩には礼懺した。

養和三(二)(AD二一八三or二一八四)年夏四月、にわかに病氣になったけれど、日課をおこたらなかった。

六月二十四日、印を結んで坐ったまま滅した。…」

② 『院譜』(ア)～(エ)には、

「第三世・心覚・仏種坊は、…真言密教の諸流の奥義を究めるために高野山に入り、往生院の遍照光院に住んだ。」

宏教律師は次のようにいう。

「往生院・心覚は、

兼意

覚印（平等坊・永嚴の高弟）

宝心（理性院・法眼・賢覚の高弟）等の阿闍梨の弟子である。このほか仁和寺・醍醐寺において密教の研鑽に励んだ人物である。

心覚が真言宗に転向した当初、彼の流儀を常喜院流とよび、高野山に入山した後は、往生院流とよぶ。」

③『年譜』（エ）―（カ）には、

「宰相・阿闍梨・心覚。：

高野山に隠居して、長和親王の息子にして、禪定院僧都・寛意の弟子である兼意阿闍梨に従い、灌頂を受け、

密教の奥義を究め、

ことごとく諸尊法を伝承した。

一日に三回、行法して、一日も休まなかった。

ある時、心覚は、師を詣ねて、大師の『遺告』の伝受を求めた。

その時、兼意は考えた。

「心覚は元、天台宗の人である。簡単にこれを許可してはならない」と。

すなわち久しく思案に暮れていたが、ある夜、大師が夢枕にたつて

「心覚は修行の志しが明確で、信念がはっきりしている。

彼の求めに応じて『遺告』を伝授することを、ためらってはならない。

早くこれを授けなさい。」と、

兼意は驚覚して、ただちに使を遣わして、心覚をよんだ。

心覚も、また、大師の夢告をうけており、師のところに赴く途上であった。

途中、兼意の使と出会って、ともに、師のところに赴き、夢告の旨をはなした。師の夢と、全く同じであった。

師資は感激して、即時に『遺告』を伝授した。

心覚は、自の流儀をたてた。広沢の常喜院流がそれである。

養和二年(AD一二八二)四月(あるいは治承四年/AD一二八〇)病にかかって、日を重ねた。

けれども、日課は怠らず、それによって自分の死期を知った。

六月四日、病床より起って端坐し、手に印を結び、口に真言を誦して、入滅した。

製作の尊法・書籍等の数はきわめて多い。目録は別にある。」

④『往生伝』(ウ)(エ)には、

「宰相・阿闍梨・心覚。：

その後、光明山を出て、高野山の往生院に住み、

兼意阿闍梨にしたがって、密教の奥義

諸尊の秘法

両界の灌頂を究め、

一日に三回修法し、朝晩に礼懺した。これは生涯継続した。

養和二年四月、病床に臥し、治癒しがたいことを知った。

けれども、日課は継続し、結果、時分の死期を知った。

六月二十四日、起立端坐して、印を結び明を誦え、入滅した。」とある。

上記の内容を整理すると、次のようである。

(1) 心覚の高野山入山は、①『心覚伝』によれば、久安二年(AD一一四六)ということになる。しかし、断言はできない。

(2) 心覚は高野山に入山し、往生院・兼意の門下之列り、広沢流のうち観音院流を学んだ。

(3) 密教の研鑽に余念がなく、諸尊法に関する膨大な著作を残した。その精華として『別尊雜記』があげられる。

(4) 修法に専念して、一日として怠らなかった。その結果、自分の死期を予知することができた。

〔f〕——結語——心覚とはいかなる人物か

以上の内容から、心覚の志向性、真言宗への転向の動機について、次のいくつかが問題点として、浮上してくる。

①心覚は、天台宗の学僧として『天台摩訶止観』所説の「十乗観法」を学んだ。天台三大部のうち『摩訶止観』を代表させたことは、彼が観行、すなわち実践を志向していたことを伺はせる。

②心覚は、論義の後、当時の密教・浄土教の実践者が拠点とした、光明山寺へ入山。密教・浄土教の実践に励んだ。これは、従来、論義を真言宗転向の契機とするが、①に注意した彼の実践志向を補足するであろう。

③心覚は、光明山から高野山へ移り、更なる密教と浄土教の実践にはげんだ。

ここで、結論めいたことをいえば、心覚は、学僧として、すなわち学問主体の仏教学を志向せず。むしろ、悟りへの深い憧憬から、仏教の実践門に傾斜した。それは、観行・念仏・密教の修法の実践である。

これは、心覚の天台宗時代の基礎学が、上述の『摩訶止観』であつたことに端緒をもつであろう。後、光明山における密教と浄土教の併列修行を経て、高野山へ入山し更なる実践にはげんだ。

以上をふりかえってみれば、心覚は、小野流・真言密教の修法の実践と、三論系浄土教の実践を併修した、その当時の東南院・三論宗系のスタンダードな仏道実践者といえるのではないか？

この点は、多くの東大寺・東南院・三論宗の学匠たちがおこなった、三論・真言・浄土の併修というスタイルと見事に符合する。この併修が、当時の仏教実践を志向する人々の、特徴であるといえないだろうか？

心覚の真言宗転向は、むしろ東南院・三論宗系の真言・浄土実践家への転身といった方がよいのではないか？
以上が、彼に関する伝歴史料を読みとくことによって、えられた仮説である。

〔a〕 常喜院流伝書目録

① 『当流伝授記』

『四度次第』

『灌頂私記』

『大事一度』 (二紙・血脈)

『心抄・小折り紙』 (五十二尊、門不足か)

『心密抄・小巻物』 (十四卷。このほか『異尊』上下二巻)

勸学会共同研究助成報告常喜院・心覚の教学について

『心密略抄』七帖 (已上を三部抄と号す)

『作法集』四卷

『別尊略行抄』三卷 (成浄坊作)

『小卷物』(百八通)

『常抄』(十二卷)

『諸尊行法』(上下二卷)

『成蓮抄』二十卷

『真言集』三卷

『讃集』一卷 (紀の上人に在るばかり)

『別尊雜記』(五十卷)

右のほか、予見自草の目録これあり (八十九部・数百卷)。

② 『常喜院流略伝授録』

a、『当院附法状』

「常喜院流

印可。具書授与の事。

『心抄』

『小折紙』

『遍照光院累代院譜并追加』(『金剛峰寺・諸院家析負輯』巻10・続真全・pp 598 a)

『心密抄』

『小卷物』 十四卷

『心抄』 上下・二帖

『成蓮抄』 二十卷

『心密略抄』 七帖

『略行抄』 七帖

『諸尊行法』 上下・二帖

『心密抄』 十四卷また『異尊法』二卷

『真言集』 三卷

以上、これを授けおわんぬ。

『四度次第』

『灌頂私記』

『作法集』 四帖

以上、書籍にとどめるによって、先規に任せて免許せしめおわんぬ。

『常抄』 十二卷

『別尊雜記』 五十卷…（pp 476～477）

b、
『宏盛の先師、梅尾・善財院・觀法上人・竺營阿闍梨附法状』

「大体、前の如し。」

『心抄』 小折紙・七卷

(仏頂部) 仏眼・金輪・尊勝・大仏頂・熾盛光

(仏部) 阿弥陀・釈迦・薬師・光明・舍利

(経部) 仁王経・法花・般若心経・理趣経・宝篋経・守護経・六字経・呪賊経

(観音部) 聖観音・千手・馬頭・十一面・准胝・如意輪・不空罽索・多羅

(菩薩部) 延命・普賢延命・普賢金剛薩埵・五字文殊・八字文殊・弥勒・地藏・虚空藏・五大虚空藏・

金剛王・地世菩薩・勢至・薬王菩薩・大勝金剛・円満金剛・馬鳴菩薩・龍樹菩薩

(明王部) 不動・隆三世・軍荼利・大威徳・金剛夜叉・愛染王・金剛童子・烏枢沙摩

(天等部) 焰摩天・吉祥天・水天・地天・訶利帝・歡喜天・氷訶羅天・北斗・毘沙門・弁財天・宝蔵

天女・摩訶迦羅天・十二天・囊虞利童女・施餓鬼

『心抄』小巻物・四十卷・八結

(仏部) 阿弥陀・薬師・釈迦

(仏頂部) 尊勝・仏眼・金輪 已上、六帖・一結

(経部) 舍利・法花・仁王経・呪賊経 已上、四帖・一結

(観音部) 聖観音・千手・馬頭・十一面

准胝・如意輪・不空罽索 已上、七帖・一結

(菩薩部) 弥勒・延命令?・普賢延命・普賢金剛薩埵・五字文殊・八字文殊・虚空藏・地藏 已上、

八帖・一結

(明王部) 不動・降三世・軍荼利・大威徳・金剛夜叉・愛染王 已上、六帖・一結

(天等部) 吉祥天・焰摩天・水天・賀利帝母・地天 已上、五帖・一結

(支度度) 支度・卷数・公私修法用意歴卷数・同状 已上、四帖・一結

『心抄』上下・二帖、三十六尊これあり。(朱) ……全部折紙『心抄』と同物也。

(上 結) 阿弥陀・釈迦・薬師・仏眼・金輪・尊勝

仁王経・法花・舍利

聖観音・千手・馬頭・十一面・准胝・如意輪・不空罽策 已上、十六尊

(下 結) 延命・普賢延命・普賢金剛薩埵・五字文殊・八字文殊・虚空藏

不動・降三世・軍荼利・大威徳・金剛夜叉・愛染王

吉祥天・焰摩天・水天・地天・賀利帝母

呪賊経 已上、二十尊

『成蓮抄』 二十卷。

(朱) 兼意の作なり。

「菩提院流の口に云う。

『成蓮抄』は、三十卷・十卷・二十卷の本これあり。

十卷本は、二十卷抄を詮して、これを作る。」

(第一) 通用行法

(第二) 孔雀経法

(第三) 素怛𑖅法↓法花・王経・宝篋印・守護経・宝楼閣・心経・無垢浄光・童子経・六字経

(第四) 転法輪法

(第五) 愛染王

勸学会共同研究助成報告常喜院・心覚の教学について

(第六) 諸如来法↓薬師・阿閼・宝生・阿弥陀・釈迦・定光・善名称・又釈迦

(第七) 大勝金剛・金剛隨心・光明真言・真言院御念誦・円満金剛・深沙神

(第九) 求聞持

(第十) 八字文殊・五字文殊・六字文殊

(第十二) 一字・大仏頂・尊勝・熾盛光

(第十二) 金薩・弥勒・大般若菩薩・普賢・得大勢・金剛藏・馬鳴・龍樹・地藏・虚空藏・延命・薬王

(第十二※十三の誤りか) 大悲生

(第十四) 不動

(第十五)

(第十六) 北斗七星

(第十七) 聖天

(第十八) 毘沙門・吉祥天・焰摩天・訶梨帝・呪賊経・氷迦羅天・水天・大自在天・大青面金剛

(第十九) 妙見・十二天・神供・梵天・地天・大黒天・伎芸天・弁財天・摩利天・迦楼羅・帝釈・羅

刹天・風天・那羅延天・宝蔵天女・囊虞利・波沙波陀夜天

(第二十) 施餓鬼…

『心密略抄』 七帖・五十七尊なり。

(朱書) に云う。

「或記に云う。

『心密略抄』七卷・五十三尊、北院・御室、御類集して御流の聖教に加えられるなり。』

※以下、内容は略し、抄物の名称と巻数のみをあげる。

『略行抄』 七帖

『諸尊別行法』 上下・二帖

『心密抄』 十六卷

『常抄』 十一卷

『別尊雜記』 五十七卷

『真言集』 三卷 (pp 472 - 501)

c、
『常喜院自草目錄』

『金剛界抄』 六卷

『胎藏界抄』 十卷

『兩界図曼荼羅』 三卷 (台二・金一)

『兩界口伝』 大衍房流

『兩界口伝』 二卷 (光明山・上定房)

『胎藏印明抄』 二卷 (付延命院次第)

『真言集』 五卷

『讚集』 一卷

『梵語集』 二帖

『雜要抄』 三帖

勸学会共同研究助成報告常喜院・心覚の教学について

- 『勸発道心抄』 四帖
『尊勝陀羅尼集』 一卷
『別尊類聚抄』 五十余卷
『作法集』 四卷
『薬師集』 一卷
『不動集』 一卷
『聖天集』 一卷
『十二天抄』 一卷
『炎摩天抄』 一卷
『五字抄』 一帖
『炎師御口伝集』 一帖
『四種護摩類聚抄』 一卷
『十七尊類聚名目』 一卷
『四天王類聚名目』
『阿弥陀法』 広略二本
『法華法』 広略
『尊勝法』 一卷
『光明真言法』 一紙、又一帖
『愛染王法』 一紙

- 『求聞持法』 次第・口伝
『仏眼法』 一卷
『孔雀經法』 一卷
『真言院法』 一卷
『別尊雜記』 六帖
『悉曇抄』 二卷（上定房の拾遺あり）
『五色抄』 一卷
『十二門戒体』 一卷
『金輪法』 一卷
『八千枚抄』 一卷
『如意輪法』 一帖または一紙
『不空絹策』 一卷
『准胝』 一卷
『馬頭』 一卷
『地藏』 一卷
『普賢延命』 一卷
『大威徳』 一卷
『十一面』 一卷
『瑜祇經真言』 一卷

勸学会共同研究助成報告常喜院・心覚の教学について

『理趣経段々印集』 一卷

『花藏院真言集』 一帖

『加利帝』 一卷

『御素木加持』

『支度・卷数集』 一帖

『悉曇十條疑問』 一卷（十問答）

以下、後にこれを加う。

『千手抄』 一帖

『聖観音』 一卷

『降三世』 一卷

『軍荼利』 一卷

『金剛夜叉』 一卷

『仁王経』 一卷

『同本尊』 一卷

『請雨経法』 一卷

『吉祥天』 一卷

『浮図集』 一卷

『貝葉集』 五十卷

『訳人集』 一帖

『法華音義』 十卷

『表白集』

『延命法』

『釈迦集』 一卷

『弥勒抄』 一卷

『台藏印口伝』 一卷

『台藏十問答』 一卷

『一遍集』 三卷

『孔雀經御修法問事』 一卷

『灌頂雜抄』 一帖

『灌頂次第真言』 一卷

『灌頂真言点』 一卷

『灌頂私抄』 一卷

『伝法灌頂相承略記』 一卷

『達摩掬多抄』

『灌頂発問集』 四卷

『五色線集』 一帖

『護身法』 一紙

『梵漢相對抄』 五十卷… (pp 五〇一～五〇五)

（『東密諸法流印信類聚』第19巻・伝授目録IV広沢流・pp四五九・東方出版）

おわりに

おわりに、覺鑊の伝流所伝の法式によって、覺鑊や心覺当時の諸流兼学のありようをみてみよう。

伝流の印可と、本来授与される印信・聖教の關係を示せば、次のようである。

第一回は初重の印可で、『本願方』の印信・血脈がわたされた（以下、印信は*印）。

その内容は、灌頂道場に引入された後、

入仏三昧耶

普賢三昧耶

外五鈷印・満足一切智々の明

塔印・普賢一字の明

阿闍梨位の印・明

以上の印明が授与されるもので、本来は、この後、次の聖教が授けられた。

伝流の四度に関する聖教

『伝流小巻』全六十七巻（池上僧都・尋海の作）

『伝流鈔』全十巻のうち、第七巻まで。

第二回目は二重の印可で、本来は、印可の後、次の聖教と印信が授けられる。

* 『**𠬞**字不断秘觀』

* 『即身義大事』

『伝流鈔』第八卷から第十卷まで。

* 『多聞天王大事』

『要尊法鈔』（平等坊・恵什の作）

* 『菩提心論大事』

* 『求聞持秘印』（中觀上人・木播の心空の伝）

* 『五輪九字大事』

* 『即身成仏義言』

『五輪九字秘釈』

第三回目は三重・四重・五重の印可である。
本来はここで、

* 『伝五』

* 『番心五』

* 『中院大事』

* 『小嶋第九塔印』

* 『常喜院流大事』

* 『伝三大』

* 『柿袋大事』

* 『極秘・智位房』

* 『閑観房』

* 『臨終大事』等が授けられる。

実際、筆者が伝受の際に授与された印は、都合九種であった。その九種の印を授与されることによって、小嶋流、常喜院流、持明院流、中院流、木播伝、小野流等の野沢諸流が相伝されたことになる。

この時、伝授された印信類の中に、「常喜院流大事」なるものがあつた。これは、覚鏤上人の高弟である兼海から数えて七代目にあたる経瑜が、隆盛なる人物より受法し、それ以後、伝流の一部として相承することになったものである。

この常喜院は、本研究の直接の対象である常喜院・心覚を流祖とする法流で、また往生院流ともよばれる。伝流では、この「大事」のほか、心覚撰の『真言集』全三巻も聖教の一部としている。

もちろん、ここにあげた現行の伝流聖教・法脈のすべてが、覚鏤上人に帰されるものではなく、また一時に類聚されたものでないことは贅言をようさない。

しかし伝流所伝の西院・保寿院・常喜院・持明院・小嶋・理性院等、多くの流派は、伝記の記述をみても、少なからず上人と関係があつたことは認められるであろう。

筆者はそこに、覚鏤当時の密教の特徴の一つを垣間みる。すなわち諸流兼学である。

また覚鏤や心覚が活躍したこの時代は、釈尊の入滅から数え、ちょうど「末法の世」のさなかにあたる。

おりしも、この頃は、「保元・平治乱」に代表されるように、各地で争乱が頻発し、その結果、いずれ貴族中心

の官僚的社會形態から、武力を背景とする武士中心の社會形態へと、社會構造がめまぐるしく變化しつつあった。この様な時代的背景から、当時の宗教的關心は、淨土教にむけられた。

筆者は、諸流兼學と淨土教が、中世の眞言教學の特徴を形成したと考える。本稿の主人公である心覺は、まさに、その時代の最中、天台宗の學僧としての立場を捨て、当時の新勢力であった、光明山寺の東南院・三論宗系の眞言密教と淨土教の併修を旨とする仏道實踐者集團へ投じた。

彼は、名実ともに遁世をなしとげることが出来た稀有な人物であると云えるであろう。

心覺は、覺鑊上人とはほどころ活躍した。本稿では彼にまつわる伝記史料を渉獵して彼の生涯をあとづけた。しかし、心覺にまつわる教理書・實踐書の類は、巷間もつとも著名な『別尊雜記』等、きわめて小数のものしか被見の機会がないという現状にあつたため、言及できなかったといううらみがある。

筆者は、数度にわたって京都・滋賀の古刹寺院の経庫を調査して、『作法集』四卷・『鶴林鈔』上下などを撮影入手することができた。だが、肝心の『成蓮鈔』は入手しえなかった。今後、折をみて、彼の實踐論の特徴を上記の資料を入手、依用して検討したい。

(本稿…まとめ、文責、田中悠文)